

## 平成 29 年度 名古屋大学心の発達支援研究実践センター 心理発達相談室活動報告

心理発達相談室は、臨床心理士養成大学院の一種指定校として、院生の訓練機関であると同時に、心理臨床活動を通して地域社会に貢献することを目的としている。

近年、心の問題はいたるところで取り上げられている。臨床実践を取り巻く環境や求められるニーズも多様化しており、後述するが、心理発達相談室が扱う相談内容も多岐に渡ることがいくつかの数字から示唆されている。このような現状の中、いかに臨床訓練を積み重ね、自己研鑽を行っていくかは極めて重要な課題である。心理発達相談室では、平成 27 年度の「心の発達支援研究実践センター」への改組、他研究科との連携による相談室環境整備、臨床現場の実際に焦点を当てた紀要特集の企画などを通して、これらの課題に取り組み続けている。従来どおりの臨床実践、自己研鑽だけでなく、このような新たな視点からのアプローチは、相談室スタッフが実際の視点を持つことに寄与する結果となった。

### I 相談員の構成

平成 29 年度の当相談室の人的構成は、教員 15 名、非常勤心理士 1 名、指導員 31 名、大学院研究生 1 名、大学院生 47 名、事務職員 3 名であり、総勢は 98 名である。室長は、金子准教授が務めた。平成 29 年度の相談室スタッフの名簿を表 6 に示す。

### II 相談活動

#### 1. 平成 29 年度新規相談受理事件数

平成 29 年度の新規受理面接数は 77 件であった（表 1）。平成 28 年度の 95 件に比べ、17 件減少している。

相談内容別の受理面接数を表 2 と表 3 に示す。12 歳以前では、発達障害が 14 件（58.3%）、情緒障害が 10 件（41.7%）であった。それぞれの件数は前年と比べて減

少しているものの、相談内容の割合に占める発達障害の割合は 47% から 58.3% に増加していた。13 歳以降の相談では、親の相談 36 件（68%）とその他 8 件（15%）がほとんどを占める状況であった。親の相談の内訳をみると、親子関係 16 件、発達障害 11 件、その他 5 件、子どもの不登校 3 件、精神障害 1 件であった。例年に比べ、親の相談に分類される内容が非常に多くなっており、その中でも発達障害の子どもへの対応を含む親子関係の問題が多いことが本年度の特徴である。

#### 2. 平成 29 年度面接種別相談件数

平成 29 年度の面接種別相談件数を表 4 に示す。年間の相談件数の総数は 3,739 回であり、平成 28 年度の 3,381 回より増加した。

面接種別では、平成 28 年度と同様に「臨床心理面接」が最も多く、1,389 回であった。次いで「並行面接」、「遊戯面接」の順に多いことも前年度と同じである。「集団心理面接」は 77 回であり、前年度の 58 回よりも増加した。現在、集団心理面接は、平成 21 年度から始まった発達障害児を持つ両親を対象としたペアレントトレーニングを実施しており、集団心理面接の増加は、このペアレントトレーニングへの参加者の増加が影響していると考えられる。

月別の相談件数の推移を見ると、最も面接数が多いのは 3 月であり、最も少ないのは 5 月であった。年間を通して、「臨床心理面接」は 100~130 回程度、「並行心理面接」は 70~130 回程度、「遊戯面接」は 70~90 回程度とかなりのばらつきがみられた。集団心理面接を除き、どの面接形態でも 5 月の実施数が少なかった。5 月は大型連休もあることから、その影響がうかがわれる（集団心理面接は、5 月から開始となるため状況が異なる）。

名古屋市の委託事業として実施している自死遺族カウンセリングの新規受理面接数は 0 件であり、面接は行わ

表 1 受理面接ケースの年齢、性別

性別／(年齢)	乳幼児 (0~3)	就学前 (4~6)	小学生 (7~12)	中学生 (13~15)	高校生 (16~18)	大学生・成人 (19~)	計 (%)	自死遺族 カウンセリング	震災による 心のケア
男	1	4	9	10	2	6	32 (41.6)	0	
女	1	2	7	6	3	26	45 (58.4)	0	0
計 (%)	2	6	16	16	5	32	77 (100)	0	0
	24 (31.2)			53 (68.8)					

表 2 12歳以前の相談内容別受理面接数

診 断 (主症状)	件 数 (%)
発 達 障 害	14 (58.3)
広 汎 性 発 達 障 害	14
精 神 発 達 遅 滞	0
注 意 欠 陥・多 動 性 障 害	0
学 習 障 害	0
情 緒 障 害	10 (41.7)
親 子 間 の 問 題	3
不 登 校	1
神 経 性 習 癖	1
集 団 適 応・友 人 関 係	1
臆 黙	0
虐 待	1
そ の 他	3
計	24 (100)

表 3 13歳以降の相談内容別受理面接数

相 談 内 容	件 数 (%)
人 格 障 害	0 (0)
発 達 障 害	2 (4)
対 人 関 係	2 (4)
不 安 神 経 症	0 (0)
う つ 病	1 (2)
思 春 期・ア イ デ ン テ ィ テ ィ	1 (2)
統 合 失 調 症	0 (0)
不 登 校	1 (2)
夫 婦 関 係	0 (0)
外 傷 後 ス ト レ ス 障 害	1 (2)
臆 黙	0 (0)
強 迫 性 障 害	1 (2)
摂 食 障 害	0 (0)
親 の 相 談	36 (68)
精 神 障 害	1
発 達 障 害	11
子 ども の 不 登 校	3
親 子 関 係	16
そ の 他	5
そ の 他	8 (15)
計	53 (100)

れなかった。

同様に、震災に対する心のケアの心理相談の新規受理面接の申し込みもなかった。

### Ⅲ 研究活動

当相談室の研究活動としては、リサーチ会議、各種研究会の開催、相談室紀要の刊行が挙げられる。相談室スタッフによる国内外における学会発表や学会誌への投稿も積極的に行われている。

平成29年度のリサーチ会議の内容を表5に示す。平成29年度は、教員による研究発表が1回と、院生スタッフによる研究発表が3回（うち2回は同日発表）行われた。平成28年度の発表が教員と指導員のみであったことと比較すると、院生スタッフの研究発表の場としてリサーチ会議が有意義に活用されたことがうかがえる。今後もリサーチ会議の場を、スタッフの研究活動や臨床実践の活性化に役立つ場としていきたい。その他院生が主体となった勉強会や各研究会活動も活発に行われた。

年1回発行している相談室紀要では、平成29年度は「広がり続ける臨床心理士の可能性を探る－多様化する領域の中で－」および「心理臨床レクチャーシリーズの報告」をテーマとした4編の特集論文と、1編のレクチャー報告が掲載された。また、事例論文が2編掲載され、相談室活動を通しての研究実践報告が行われた。

学外での相互研鑽の機会として、平成29年度も「五大学合同事例検討会」が開催された。これは、心理相談室をもつ国立大学のうち、東大、京大、広大、九大および名大の五大学の大学院生が主体となって開催するものである。平成29年度は東京大学が主幹校となり、7月に東京都中央区にて開催された。事例検討会が開かれ、それぞれの大学からの参加者と、臨床実践についての活発な意見交換が行われた。加えて、この貴重な機会を有意

表 4 平成29年度 面接種別相談件数一覧

	平成29年					平成30年					合計		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月		2月	3月
受 理 面 接	8	7	5	10	7	5	8	5	4	4	5	9	77
ガイダンス面接	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
検 査 面 接	0	1	1	4	5	1	0	0	2	4	3	2	23
遊 戯 面 接	80	67	82	85	73	91	85	86	77	82	76	85	969
臨 床 心 理 面 接	104	109	125	112	107	111	123	135	118	104	112	129	1389
並 行 心 理 面 接	95	85	99	99	92	101	109	101	103	94	94	116	1188
集 団 心 理 面 接	0	15	7	16	12	8	14	3	0	0	0	2	77
家 族 合 同 面 接	0	1	1	0	2	1	2	2	2	1	1	3	16
計	287	285	320	326	298	318	341	332	306	289	291	346	3739
自死遺族カウンセリング	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
震災による心のケア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 5 平成 29 年度 心理発達相談室リサーチ会議ほか一覧

	演 者 (所 属)	題 目
第1回 (2017年6月29日)	ウテク イシユク (名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻D3)	Youth Social Issues in Nigeria.
第2回 (2017年11月30日)	野邑健二 福元理英 若林紀乃 (名古屋大学心の発達支援研究実践センター)	モンゴル国の発達障害児支援研究 ～海外共同研究の経緯と展開～
第3回 (2018年2月22日)	三谷真優 (名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻D3) 中島卓裕 (名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻D2)	心理臨床家の専門性の発達 「システム」という窓から見える景色—発達・臨床 そして支援について—

義なものにしようと本校の大学院生たちが協力し努力したことも特筆すべき点である。

#### IV 教育・訓練体制

当相談室の教育・訓練体制の中心は木曜日の午前中に行われるケース会議である。ケース会議では、新規に受付した事例に関する報告や諸連絡事項の伝達を行う全体会の後に、5分科会に分かれて約2時間をかけてケース検討を行っている。ケース会議は、大学院の「心理臨床研究実習」として位置づけられており、相談室の運営とケースの担当とそのスーパーヴィジョンを受けることが含まれている。

スーパーヴィジョン制度は、ケース会議と並んで、相談活動の技量を高めるために大きな役割を果たしている。新規スタッフは、当相談室教員を特定のスーパーバイザーとし、初年度の臨床実践指導を受けることが必須となっている。その他の大学院生スタッフは、ケースごとに教員や指導員、あるいは学外の臨床家によるスーパーヴィジョンを受けている。

平成 23 年度から大学院のカリキュラムが改訂され、前期課程1年の院生向けの講義を統合した「臨床心理学研究Ⅰ」「臨床心理学研究Ⅲ」がスタートしている。電話受付ガイダンスもこの講義の中に位置づけられてい

る。相談室以外の教育訓練の場である実習については、医療領域、教育領域、産業領域、福祉領域と幅広く充実した体制がとられている。

平成 24 年度から、相談室運営実習として、受付事務、資料整理、電話対応など、さまざまな相談室運営に関わる活動を体験する実習を実施している。

また、近年社会的にも重要視される個人情報の保護に関しては、平成 25 年 4 月の相談室ガイダンスから、相談室長による個人情報保護に関する研修会が行われている。

#### V 相談室運営

当相談室は、教員から構成される相談室運営委員会、および教員（相談室長・臨床研究助手）と大学院生の各学年代表および各係代表から構成されるスタッフ委員会を組織し、相談室活動全般の企画運営を行っている。いずれも毎月1回の定例会を開催し、意見交換を行うとともに、相談室の諸問題を検討する場としている。その他にもスタッフ全員が参加するスタッフミーティング（定例では7月と3月の年2回）を開催して、円滑な相談室運営やスタッフ間の情報共有を心がけ、全構成員による運営を実現するよう努力している。

(文責：石川佳奈)

表 6 平成 29 年度 心理発達相談室スタッフ

教 員	金子 一史(相談室長)			
	森田 美弥子	・ 窪田 由紀	・ 松本 真理子	
	金井 篤子	・ 平石 賢二	・ 河野 莊子	
	永田 雅子	・ 五十嵐 哲也	・ 野邑 健二	
	福元 理英	・ 若林 紀乃	・ 神野 真麻	
	山脇 彩	・ 石川 佳奈		
非常勤心理士	永野 祥子			
指 導 員	石川 雅健	・ 伊藤 義美	・ 伊藤 亮	
	今村 友木子	・ 大崎 園生	・ 蔭山 英順	
	葛 文綺	・ 加藤 大樹	・ 川島 一晃	
	川瀬 正裕	・ 後藤 秀爾	・ 小林 佐知子	
	三後 美紀	・ 杉岡 正典	・ 鈴木 健一	
	鈴木 亮子	・ 瀬地山 葉矢	・ 高橋 靖子	
	田 畑 治	・ 坪井 裕子	・ 西出 隆紀	
	西出 弓枝	・ 野村 あすか	・ 堀 美和子	
	本城 秀次	・ 前川 由未子	・ 丸山 笑里佳	
	丸山 宏樹	・ 安田 道子	・ 山内 星子	
	山口 智子			
大学院研究生	濱家 徳子			
大学院生DC	織田 万美子	・ 林 亜希恵	・ ウテク イシユク	
	風間 惇希	・ 田中 あかり	・ 三谷 真優	
	山下 陽平	・ 浦田 有香	・ 清水 麻莉子	
	陳 迪	・ 中島 卓裕	・ 中野 まみ	
	二宮 有輝	・ 小橋 亮介	・ 肖 瀛子	
	福田 律子			
大学院生MC	大矢 智子	・ 加藤 里実	・ 汲田 香菜子	
	小林 惟弘	・ 近藤 穂花	・ 近藤 真知香	
	酒井 菜月	・ 高須 万智	・ 中村 優花	
	芳賀 安	・ 原田 雅也	・ 南野 和哉	
	村松 百合恵	・ 矢井 利佳	・ 横山 佳奈	
	吉田 翔子	・ 伊藤 拓	・ 稲垣 美絢	
	小島 朱理	・ 川島 万由子	・ 崎山 美穂	
	酒井 麻紀子	・ 杉山 円香	・ 角谷 友理香	
	鶴田 裕子	・ 丹羽 麻有	・ 深谷 麻未	
	藤本 みち	・ 古橋 健悟	・ 山田 優子	
	吉川 菜摘			
受 付	小笠原 順子	・ 長谷川 千里	・ 原 雅子	